

ルワンダ ルワンダ子ども支援基金「遠足」の報告

ARCの「ルワンダ子ども支援基金」では、ルワンダの戦災孤児やエイズ孤児たちに対して、これまで学費・制服・学用品の支援、協力機関である孤児院「ギシンバ・メモリアル・センター」の衛生環境改善のための水タンク設置支援などを行ってきました。

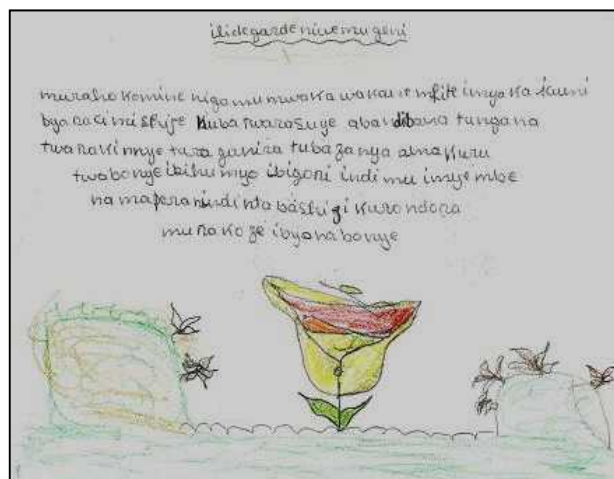
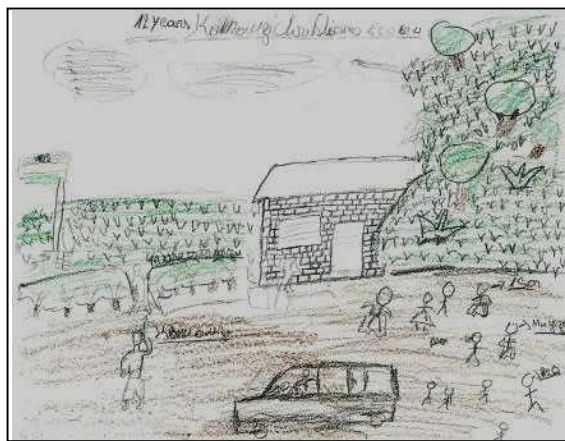
そして今年、同センターで勤務する青年海外協力隊員・田中富美代さん（現在は任期を終えられ日本に帰国されました）からのご提案で、センターの子どもたちを対象として「遠足」に「子ども支援基金」からの支援を行いました。

センターには常時100人程度の子もたちが生活しており、スタッフたちも日常の世話だけでも大変です。しかし子どもたちにとっては学校以外の外の世界に触れることも大切であろうということから、試験的に実施いたしました。結果としては大盛況で、日常とは違う刺激や学びになったのではないかと思います。

（小峯茂嗣）



ギシンバ・メモリアル・センターの子どもたちからの絵が届きました。「ルワンダ子ども支援基金」にご寄付くださった方には「直筆」の絵をお送りしております。



ストップ子ども兵士アクション

映画「見えない子どもたち (Invisible Children)」上映報告 & 自主上映会のオススメ！

2004年から始めたキャンペーン「ストップ子ども兵士アクション」の一環として、9月18日、渋谷の環境パートナーシッププラザで、また11月18日には早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターとの共催で、ウガンダの子ども兵に関するドキュメンタリー映画『見えない子どもたち (原題は「 Invisible Children 」)』(2006年)を上映し、現地の子どもの兵の現状についての講演を行いました。

映画『見えない子どもたち【 Invisible Children 】』とは

アメリカ人の若者3人がウガンダの現地を訪れ、そこで出会った子ども兵の現実に衝撃を受け、帰国後製作したドキュメンタリー映画。アメリカでは、このドキュメンタリーを鑑賞した人々の間で、子ども兵に関する認識が高まり、問題解決のための具体的なアクションにも結び付きました。

Invisible Children 英語ウェブサイトには、現在進行中のアクションの詳細も紹介されています：

<http://www.invisiblechildren.com/home.php>

当日は60名程度の参加者がご来場くださり、会場がいっぱいになりました。アフリカの紛争や子ども兵士の問題、またドキュメンタリー映画にご関心のあるたくさんの方々にご出席いただき、上映会は大成功に終わりました。

上映後にご質問やご意見を活発にいただき、参加者の意識の高さがうかがえました。ARCのホームページでは、「ストップ子ども兵士アクション」ブログが開設されており、来場者の感想も載せております。ぜひご覧ください。

<http://gaialog.jp/arc-japan/childsoldier>

アメリカの自分と同世代の若者がこのような人の心を動かす映像を作ったことに驚くとともに、嬉しく思った。この映画には、アフリカの問題を提示するだけでなく、次のステップである「動き」を作る力があると思った。

アメリカの3人の若者のパワーが日本まで伝わって、伝えていこうとする力ってすごいなと感じました。

「9.11は報道されるのに、ウガンダのことは報道されない」。報道されない人々の目には見えない。こういった報道されていない悲惨なこともあるんだなと知った。

何故、今まで自分がこんなに悲しい事実を知らなかったのか、というのが最初の感想です。自分が現実だと信じている世界がいかに狭いものか、いかに自分に都合よく生きてきたのかも反省させられました。

二度目の鑑賞でした。子ども兵の問題についてやはり言葉で人に伝えるのは難しく、また見に来ました。

私はスリランカからの留学生です。25年以上の内戦で、スリランカも大変な状況におかれています。また、タミル人の子ども兵士のもんだいもある。ウガンダだけではなく、スリランカにもこのような同じ問題があるので、注目させていただければと思います。

「この子どもたちは死ぬ運命にあるのよ」という発言がなされていたことに悲しさが胸一杯になりました。

生きることよりも、死ぬことの方がいいと言った男の子。私たちは「死ぬこと=死ぬこと」という考えがほとんどだけれど、ウガンダの子どもにとっては「死ぬこと=殺されること」という考えになってしまうのですね。ショックです。

以前、仕事でウガンダから難民として来日した方と関わりました。母国では兵士だったという彼でしたが、このような世界で生きてきた人なのだなということがわかりました。

ウガンダに今年2回も行ったのに、映画のようなことを知らなかったのが残念でした。これからも後輩たちがウガンダで活動すると思うので、現地に行く前にこの映画を見せたいと思います。

「知る」ことは世界を拓く第一歩です。「無関心」こそが「愛」対極であり、最大の罪悪です。一人でも多くの方が、この映画に触れ、自分自身と世界を変えるきっかけを得てくださることを願っています。

早稲田大学での上演後の参加者の感想

ARCでは、この映画「見えない子どもたち (Invisible Children)」を日本全国で上映したいと考えております。各地で自主上映会を企画される個人・団体の皆様に映画のDVDの貸し出しを行い、キャンペーン「ストップ子ども兵士アクション」に、より多くの人たちに賛同をしていただきたいと思います。お問い合わせは以下のメールアドレスまでお願いいたします。

childsoldier@arc-japan.org (担当：大久保美希)

株式会社道祖神イベント「UGANDA MOVIE & TALK」報告

アフリカを専門とする旅行会社の道祖神さんのイベント「UGANDA MOVIE & TALK」が、浜松町のアフリカン・レストラン「カラバッシュ」で行われ、小峯茂嗣事務局長がトークのゲストとして出演いたしました。このイベントでも映画「見えない子どもたち」の上映を行い、小峯事務局長とジャーナリストの下村靖樹氏により、ウガンダ北部紛争のあらましと、現状について、映画と絡めてトークが行われました。



会場の様子。学生さんがたくさんいましたね。



来場者とのトークセッション

小峯事務局長！

Nous devons vivre ensemble... 僕らは過去と一緒に生きていかなきゃならない!..

ルワンダ劇団ウルヴィントーレ「The Investigation (追究)」出演者へのインタビュー

2008年5月23日から25日まで、Bank ART Studio NYKにて TICAD IV(アフリカ開発会議)関連イベントとして、ルワンダのプロ劇団ウルヴィントーレ(Urwintore、ルワンダの言葉で「舞台」の意)が、「The Investigation(追究)」を上演しました。同作品はというペーター・ヴァイス原作によるアウシュビッツの裁判を描いた劇で、1994年のルワンダ虐殺を経験したドルシー・ルガンバとルワンダの俳優たちによってフランクフルトで上演されたものです。上演終了後、俳優たちへのインタビューを行いました。(報告:大辻由起)

なぜ「The Investigation」を選んだのですか？

「アウシュビッツをめぐる裁判が、ルワンダでの裁判とそっくりだからです。事件の発生時期は60年前と14年前と違うけれど、犯罪者の言い分はまったく同じ。「人を殺したことは認める。だけど、仕方がなかったんだ。命令だったから・・・」という台詞が飛び交う裁判所の光景は、ルワンダのそれと同じなんです。今でもそういう状況があるという困難さを知ってもらいたかった。」

演じながら残酷な思い出が蘇らないのですか？

「ルワンダの状況を劇中で表現しているようなものなので、思い出すという感覚ではないですねと思うこともありますが、「過去と向き合えないといけない」、「辛い過去と共に生きていかなければならない」という思いで演じています。」

(ジェノサイドの記念日である)4月7日とはルワンダの人にとってどのような意味を持つ日のですか？

「この日は、被害者が話をする唯一の機会です。話すことによって当時の情景や感情がフラッシュバックしてしまう人もいます。でもその日しか話ができないという思いから、話し続ける人もいます。トラウマになってしまうというネガティブな側面もあります。でも、この日は過去と、かつてのの敵と向き合って強

くなるという大事な日でもあるのです。」

ガチャチャ裁判はどのような裁判ですか？

「だいたい毎週水曜日に行われます。これはコミュニティ主体でジェノサイドの容疑者を裁くことを目的に行われています。この裁判は、4月7日と同様、辛い過去の思い出と向き合えない場です。また、いわゆる『敵』と顔を合さないといいない場でもあります。この裁判はもちろん裁くことが目的ですが、和解の場にもなっているんです。この場を通して人は強くなっていくんです。」

今後の課題は？

「ジェノサイド後、報復を恐れて容疑者の多くが国外に逃亡しました。最近では、この逃亡した者たちによって、ジェノサイドの事実を隠蔽しようとする動きもあります。彼らは「内戦中だったから人が死ぬのは当たり前だ」として、大量虐殺という、一方の民族が他方の民族を虐殺するという構図ではなく、互いに殺しあったのが事実だと言っているのです。本当の事実を多くの人に知ってもらうためにも、劇を通して伝えたい。被害者も加害者も正義を忘れてはいけません。」

日本の若者にメッセージをお願いします。

「ルワンダは小さな国で、アフリカ大陸の中心に位置しています。アフリカの心臓部とも言われています。私たちの国で起こった大量虐殺のことをあまり知らない人に伝えたいことがあります。それは14年前に私たちの国、ルワンダで大量虐殺が行われたこと。アーティストとして、職業を通して、この事実を伝えることが、

私たちが貢献できることだと思っています。ルワンダで起こったようなことが将来二度と起こらないことを強く望みます。同じような大量虐殺は二度とあってはいけません。私たちのような経験を誰ももう経験すべきでないのです。劇を通して、戦争や大量虐殺によるひどい事（例えば子ども兵士）に立ち向かい将来を建設していくのが私たちのやり方です。」

追悼 筑紫哲也さん

小峯茂嗣 ARC事務局長

筑紫哲也さんが亡くなりました。

1999年3月、私はルワンダの首都キガリにいました。筑紫さんはその頃、テレビの特別番組の取材でキガリに滞在されておりました。その時に初めて彼の滞在するホテルのガーデンで会い、小一時間ほど話をさせていただきました。紅茶をごちそうしてくれました。

時は流れて2004年、ARCがキャンペーン「ストップ子ども兵士アクション」の立ち上げを進めていた頃のことです。多くの方に関心を持っていただこうと、著名人の方に呼びかけ人として賛同していただこうと事務局では100件近い問い合わせをしていました。しかし賛同してくださる人はなかなかいらず、そんな時に筑紫さんの事務所から、賛同人となってくださる旨のお電話をいただきました。

その翌年、筑紫さんも登壇されたシンポジウムで6年ぶりにお会いしたのですが、ルワンダで一度だけ会ったことを覚えていてくださったのにびっくりしました。その時も筑紫さんはアフリカの子ども兵士の問題について気にかけていらっしゃいました。その後「ニュース23」でもウガンダ北部内戦と子ども兵士の問題について特集を放送されていました。

がんになられたことを知った時、お元気になられたらまたいつかお会いしたいなと思っていたのですが、ついにはそれはかなわないこととなりました。

ご冥福をお祈りいたします。



1999年3月、キガリのウムパノ・ホテルで

アフリカ平和再建委員会 (Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN)

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-6-1四谷サンハイツ511

Tel/Fax: 03-3351-0892 E-mail: headoffice@arc-japan.org ホームページ <http://www.arc-japan.org>

Mixiコミュニティ http://mixi.jp/view_community.pl?id=2115134



ARCではEメールでもイベント情報などを配信しています。ご希望の方は、上記アドレスまでメールをお送りください。登録いたします。